

F. クープラン：《趣味の融合 または新しいコンセール集》 より 第5番

フランス・バロック音楽の巨匠フランソワ・クーランが、太陽王ルイ 14 世の晩年の憂鬱を慰めるために書いたと言われるのが 1722 年出版の《王宮のコンセール》（全 4 曲）。その続篇として 1724 年に出版されたのが、全 10 曲からなる《新しいコンセール》集である。楽器の編成は自由で、「あらゆる楽器で演奏可能」とある。「趣味の融合」には、イタリア様式とフランス様式との融合という意味があり、この第 5 番は副題に「愛の肖像」とイタリア語で付され、各楽章にはフランス語でタイトルが付けられている。全 8 楽章からなり、《新しいコンセール》のなかでも特に美しい魅力にあふれた作品である。

P. ゴーベール：田園風間奏曲

20 世紀前半のパリで活躍したフィリップ・ゴーベールは、オペラ座の音楽監督やパリ音楽院のフルート科教授、パリ管の首席指揮者なども務めた人物。パリ音楽院の試験の課題曲として作曲されたこの曲は、牧歌的な雰囲気の中にも、同時代のドビュッシーやラヴェルに通じる響きを感じさせてくれる。

A. ドラティ：5つの小品 より

今日、名指揮者として知られているアンタル・ドラティは、作曲家としても多くの作品を残した。独奏オーボエのための《5つの小品》は、1980 年に作曲され、オーボエの名手ハインツ・ホリガーに捧げられている。そのなかから本日は、一聴してキャラクターの使い分けがわかる「アリとセミ」、どこか日本的な音階すら感じる「子守唄」、手品の早わざを模したような「手品」をお届けする。

ミヨー：オーボエとピアノのためのソナチネ

フランス 6 人組の一人、ダリウス・ミヨーは多産な作曲家で、ジャンルも多岐にわたる。「オーボエとピアノのためのソナチネ」は 1954 年の作。自在な跳躍、軽やかな旋律線、あふれる躍動感など、どこまでも明るい風景が広がっている。こうした特徴は、ミヨーの故郷である南プロヴァンスの風土とも関係があるのかもしれない。

G. シューマン：3つのロマンス

ロベルト・シューマンの妻であり、8 人の子どもの母であり、ピアニストとしても一流だったクララ・シューマン。作曲家としても豊かな感性を持っていたが、時代がまだ女性作曲家を認めていなかったこともあり、37 歳頃には作曲から手を引くことになる。全 3 楽章の本曲は、濃厚なロマンが香る 1853 年の作

品。同年はブラームスが初めてシューマンのもとを訪れた年でもあった。

J.D. ゼレンカ：6つのトリオ・ソナタ より 第6番

18世紀前半ドイツのバロック音楽作曲家ヤン・ディスマス・ゼレンカは、20世紀半ばを過ぎて再評価された作曲家。《6つのトリオ・ソナタ》は、彼の代表作であり、最も多産だった1721～22年頃の作品と伝えられている。この第6番は、2つのオーボエとファゴット、および通奏低音という編成で、緩／急／緩／急の教会ソナタの形式になっている。

A. ドラティ：協奏的二重奏曲

本曲は、1983年に書かれたピアノとオーボエのための作品で、《5つの小品》同様にハインツ・ホリガーに捧げられた。第1楽章では民族色を感じさせる息の長い即興風の旋律を歌い、第2楽章では生き生きと音階を駆けめぐり、ピアノとオーボエが丁々発止のやり取りを繰り広げる。